

対話指導をまとめてみた — メントスコーラのように —

久松 功 周

本稿は、2018年11月から2019年12月にかけて、中学校3年生および高校1年生を対象として行った執筆者の対話指導の実践経験から、対話を続けていくために重要な役割を果たしている要素を抽出した。対話が続いていく方向性を「深める」と「広げる」という2方向にまとめた上で、対話を「広げる」ための要素を、主に非言語的なスキルを用いて行う「雰囲気づくり」と主に言語的なスキルを用いて行う「対話への関与を」の2つにまとめ、それぞれ具体的なスキルを挙げた上で、それらの効果的な指導手順、活動をまとめた。今後の展望としては、本稿では主に聞き手の役割に着目をしたが、話し手の役割に着目し、ただ話すだけではなく聞き手と共に対話に化学反応を起こせるような話し方とはどのようなものなのかを明らかにしていくことで、より効果的な対話指導が出来るのではないかと考えている。

1. 対話の分類

対話と一口に言っても、場面や状況によってその目的は異なる。例えば、道案内という状況であれば、その対話の目的は目的地までの行き方を正しく理解するということになる。また、交渉という場面であれば、その対話の目的とは利害の異なる相手同士が合意形成を行うことがその目的となる。このような道案内や交渉といった具体的、明確な目的を持った対話に対して、友人との日常会話など、ただ会話自体を楽しむといった、明確な目的を持たない対話もある。以上のように、対話を具体的、明確な目的を持つものと、明確な目的を持たないものの2種類に分類したが、目的によって対話の内容的な特徴も異なってくる。前者の具体的、明確な目的を持った対話は目的の達成のために、誤解を避ける必要があるため、一定の話題について簡潔で論理的な内容が求められ、また相互の理解をすり合わせていく過程で内容が専門化、具体化していく傾向にある。一方で、明確な目的を持たない対話、いわば言葉をやりとり

して、それを楽しむことが目的となっている対話について言えば、内容があまりに専門化、具体化していくと話についていくことができない対話の構成員が出てきてしまうため、比較的表面的な内容に留まり、また話が専門化、具体化し過ぎる前に、話題の変更が起こる傾向にある。また、こういった対話の中ではそこまで厳密な情報の正確さが求められるわけではないので、話す内容が論理的である必然性は低く、また多少の冗長性も会話を盛り上げるものとして許容される傾向にある。この、明確な目的を持った対話と明確な目的を持たない対話の内容の発展の仕方をまとめるとすると、内容を目的の達成に向けて、論理的に専門化、具体化させていく「深める」方向と、対話の雰囲気を作ったり様々な話題について話をしたりする「広げる」方向の2種類に分類することができる。どちらの方向に内容が発展しやすいかという傾向は場面によって異なるが、どの場面においても「深める」と「広げる」という両方の方向性が用いられていると言える。

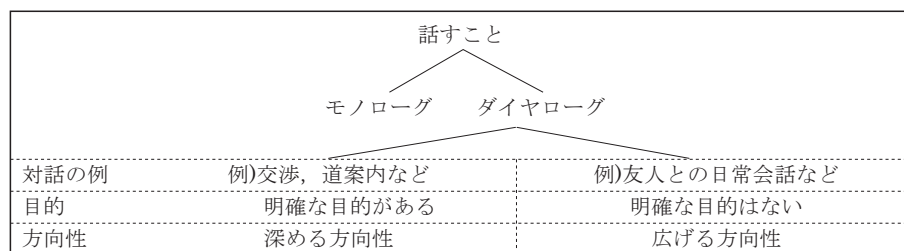


図1:話すことの整理 (豊田 (2017) を基に執筆者作成)

2. 対話を広げる指導

生徒の対話を行う能力を育成するにあたって、対話を「広げる」方向に重点を置いて実践を行ってきた。その理由としては、「深める」方向で対話をしていくためには対話が専門化、具体化しても話を続けられるだけの背景知識を対話の構成員がそれぞれ持っている必要がある。また、この「深める」方向においては、対話の目的が達成された時点で対話の必然性が失われてしまうため、(話題の設定の仕方によるが)比較的早く対話が終わってしまう傾向にある。英語を喋らせる経験を多く与えたいという実践の目的から考えると、「広げる」方向性の方がふさわしいのではないかと考え、また、今回対話の指導の対象となった生徒が中学校3年生、高校1年生であることを考えると、親しみやすい「広げる」方向性に重点を置いた対話の方が取り組みやすいのではないかと考えたのも理由の一つである。とはいえ、この「広げる」方向性の対話も、自由に話させれば成立するというものでもない。実践から得た重要なことをまとめると、「雰囲気作り」と「対話への関与」が非常に重要である。

3. 対話を広げるために重要なこと

3.1. 雰囲気作り

対話を行っていく上で、対話の雰囲気を作っていくことは非常に重要である。話し手からすると、いくら話したいことがあったとしても、関心をこちらに向けてくれない聞き手を相手にしたときに話をしたいとは思えないだろう。また、聞き手からしても話をすることにに対してやる気を感じられない話し手の話を聞こうとは思わないだろう。話し手と聞き手がお互いに対話の雰囲気作りをしていくことが重要である。この「雰囲気作り」は非常に重要な点であるが、仏頂面になっていることに気がついていなかったり、相手が話をしているときによそ見をしていたり、雰囲気作りを意識出来ていない生徒は多い。話し手、聞き手双方が以下の手段を用いながら、対話をしてくように指導をしたい。^(*1)

3.1.1. 表情・アイコンタクト・うなづき

表情・アイコンタクト・うなづきといった非言語的な要素も雰囲気を作る上で重要である。話題にもよるが、基本的にはお互いに対して受容的な印象を与える表情・アイコンタクト(ほとんどの場合は、相手の目を見ながら笑顔を作ることになるだろう)を心がけさせたい。(筆者もそうであるが)自然な

笑顔を作るといのは難しい。お互いにペアで笑顔を作れているかどうか確認させる(まず、照れを乗り越えることが難しい)などして、表情を調節できるように指導したい。

3.1.2. ジェスチャー

プレゼンテーションなどでは重要視されるジェスチャーであるが、対話における雰囲気作りでもジェスチャーを使うことは、対話への関与の姿勢を分かりやすく示し、動機づけにつながることで効果的である。話し手のジェスチャーはもちろん、聞き手のジェスチャーも指導したい。

3.1.3. つなぎ言葉・繰り返し

つなぎ言葉は“Well…”や“Let me see…”といった対話の中での沈黙を埋めるための表現である。何も“Let me see…”といった表現でなくても、“Ah…”といった簡単なものでも、不自然に長い沈黙を埋めることが重要である。また、繰り返しとは相手の言った発言の一部を繰り返すものである。この繰り返しによって、相手に関心を持っているということを伝えることで対話に対する動機付けが可能になる。

3.1.4. 雰囲気作りの指導

以上の雰囲気作りのための手段の指導としては、以下のような対話形式のものを教材として選び、音読指導の延長で行うと良いだろう。

Ken : Do you have a minute?
Emma : Yes. I've just finished my homework.
Ken : Well. I have two tickets for an English rakugo show.
Emma : Lucky you.
Ken : Why don't you come with me?
Emma : I'd love to. I've been interested in rakugo since last year.
(NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 3 (三省堂))

以上に挙げた、①表情・アイコンタクト・うなづき、②ジェスチャー、③つなぎ言葉、繰り返しを一度に全て指導しようとする生徒は混乱してしまうので、(1)本文を暗唱できるように指導する→(2)それぞれのスキルを個別に指導する→(3)それぞれのスキルを総合的に使わせながら指導する、というように以下のような段階的な指導を心がけたい。

表1 雰囲気作りのスキルの指導

(発音指導)
①本文を正しい発音で音読できるように指導する。
(声量指導)
②机を挟んでペアで向かい合って立たせ、片方の生徒が1文英語を読んだら、もう片方は本文を見ずに相手の声を頼りにリピートする。
③本文を暗唱できるように覚えさせる。
(表情・アイコンタクト・うなづき指導)
④ペアで本文を見ずに、対話を再生する。その際に、お互いの目を見て、相手が1文を言えたらうなづくように指導する。
(ジェスチャー指導)
⑤ペアで本文を見ずに、対話を再生する。その際に、お互いの目を見て、相手が1文を言えたら指でOKサインを出すように指導する。
(つなぎ言葉・繰り返し指導)
⑥ペアで本文を見ずに、対話を再生する。その際に、言葉に詰まったら、“Ah…”とって沈黙を埋めるように指導をする。また、相手の言った1文の中で意味的に重要な単語を繰り返し言ってから自分の発言に移るように指導をする。
(総合練習)
⑦ここまでの練習を踏まえて、ペアで本文を見ずに、対話を再生する。

教科書の対話形式の本文は、比較的スムーズに対話が進行するものが多く、また上に挙げたような雰囲気作りの手段が可視化されていない（ものによって、つなぎ言葉が多少入っているくらいではないだろうか）。こういった、教科書に載っていない、重要な要素を教師が補いながら指導を行うことが必要である。

3.2. 対話への関与

以上の雰囲気作りに対する関与に加え、言語的な面での関与も必要になってくる。対話においては、ターンテイキングが頻繁に起こるため、「話し手」と「聞き手」のように明確に役割を分けることは出来ないが、話の大筋を作りだして話をしていく方を「話し手」、それを聞きながら反応する方を「聞き手」と分けた場合、「聞き手」の関与に着目したい。話すことの指導となると、どうしても「話し手」に意識が向かいがちであるが、「聞き手」となっている方がどのように話し手の話に関与していくのかによって、話し手のパフォーマンスも変わってくるし、

結果として対話が広がっていくかどうかは変わってくる。具体的な手段として以下の指導が効果的である。

3.2.1. 感想・タイミング

感想とは、“Sounds nice!”や“Great!”といった、相手の内容に対して付け加える簡単な一言である。対話への関心を示すと同時に、話し手が喋っているところに、聞き手が自分の発言を差し挟むタイミングを作るためのクッションとしての機能がある。話し手の話に沿うように自分の経験を述べたり、質問をしたりするタイミングというのは意外と難しい。“Great! And then, what did you do?”のように、感想を言ってから、後に挙げる質問するなど、聞き手としての反応を差し挟むタイミングや方法も指導したい。また、話し手に対する指導として“What about you?”のように、対話のターンを聞き手に渡す指導を行うことも大切である。

3.2.2. 自分の経験

自分の経験とは、相手の発言内容について、自分の場合に置き換えて発言することである。例えば、話し手が1日に行ったことを説明する中で、朝食にご飯と味噌汁を食べたのであれば、自分はパンと果物を食べた、と言うように、自分の経験に置き換えて発言をすることで、(どのタイミングで喋るかは大切だが)対話の内容を広げていくことができる。

3.2.3. 質問

話し手の喋っている内容について聞き手から質問をすることも重要である。例えば、話し手の発話に対して、“And then?”のように話し手の発話をさらに引き出すような問いかけや、話し手が1日に行ったことを説明する中で、「勉強をした」という発言があれば、それに対して「何を」、「どれくらいの時間」などをたずねるといった問いかけが考えられる。話をより具体的にしていくという点においては、対話を「深める」方向の反応にもなるが、あまり具体的に問い過ぎると、かえって対話が続かなくなるので、「具体的な情報を引き出す」というよりも「対話への関心を示す」ものとして指導することが効果的である。

3.2.4. 聞き手のスキルの指導

以上に挙げた、感想、自分の経験、質問といった聞き手側のスキルを個別、集中的に指導していくためには、話し手が対話の軸となる流れを作り、その流れに対して聞き手が反応するという状況を作る必

要性がある。したがって、話し手が喋る内容は「1日にやったこと」など話しやすい話題を決めると取り組みやすい。具体的には、以下のような指導手順が考えられる。

表2 聞き手のスキルの指導

(話す内容を整理させる＝対話の軸作り)
①ペアになって、自分が今日したことを具体的に英語で喋らせ、ペアを変えてもう一度同じ話題で喋らせる。
(感想の指導)
②ペアを変えて、自分が今日したことを具体的に英語で喋らせる。聞き手に、相手のしたことに対して、最低5回は感想を言わせる。
(自分の経験の指導)
③ペアを変えて、自分が今日したことを具体的に英語で喋らせる。聞き手に、相手のしたことを踏まえ、自分もしたことを英語で付け加えさせる。
(質問の指導)
④ペアを変えて、自分が今日したことを具体的に英語で喋らせる。聞き手に、相手のしたことに対して英語で簡単な質問をさせる。
(総合練習)
⑤ペアを変えて、ここまでの練習を踏まえて、Free Talkの形で喋らせる。

4. 対話を広げる指導を行って

筆者の行った実践は、対話を広げるスキルをミクロに捉え、それを個別に指導できるような活動を行った。表情やジェスチャー、つなぎ言葉や感想など、一つ一つは取るに足らないもののように思えるかもしれないし、実際、そう思っている生徒は多いようである。しかし、自然と表情を作ったり、ジェスチャーをしたり、つなぎ言葉や感想を言うことは難しい。機械的に行うだけでは不自然な印象を相手に与えてしまい、かえって対話の雰囲気壊してしまうからである。かといって、何もしなければ対話の雰囲気が出来るべくもない。こういった細かいスキルを自然に行えるように、練習を重ねることが重要なのではないかという結論に至った。また、こういったスキルは、中学校1年生でも指導することは可能である。むしろ、使用できる言語表現が少ない発達段階ほど、こういったスキルを用いる必然性と動機は高いと考えられる。対話指導の入口として、こういったスキルを位置づけることは有効であると考えている。

5. 今後の展望

ある授業で生徒に本稿の内容を話していたところ、生徒が対話における話し手の聞き手の関係性をメントスとコーラに例えてまとめてくれた。その生徒曰く、「水にメントスを入れてもせいぜい溶けるだけだけど、コーラにメントスを入れると、反応が起こって吹き出してくる。その反応を引き起こしてくれる二酸化炭素やメントスに含まれる物質にあたる部分が、話し手や聞き手のスキルということですね」とのことである。その生徒の言葉を基に筆者なりに対話を広げる指導をまとめさせてもらえるならば、生徒に対話を広げるスキルを指導するというのは、化学反応を起こすような物質を生徒に与えることであるといったところだろうか。反応を引き起こす要素をもっていない者同士が対話をして、盛り上がりという化学反応は引き起こされないし、そこに言語使用も含めた対話を行う能力の伸長という個人の中の化学反応も起こりえないだろう。本稿では、聞き手として化学反応を引き起こす方法について論じた。では、話し手として化学反応を引き起こすような話し方とはどのようなものであるのだろうか。少なくとも、ただ漠然と喋ればよいというものでもなければ、スピーチやプレゼンテーションのような発表における喋り方とはまた異なった要素があるであろう。化学反応を起こす話し手とはいかなる存在なのか、それを明らかにしていくことを今後の展望にしたい。

[参考文献]

- 1) 豊田昌倫, 「会話の英語とは」, 豊田昌倫, 堀正広, 今林修, 『英語のスタイル 教えるための文体論入門』, 研究社, 2017年, 72-86.
- 2) 久松功周, 「対話指導を考えてみた - 「真面目さ」と 「テキトーさ」の狭間で - 」, 『広島大学附属中・高等学校 中等教育研究紀要』, 65, 2019年, 81-86.
- 3) 三省堂, 『NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 3』, 2016年, 24.

(*1) 雰囲気作りの手段として示したのものには、「雰囲気作り」という心情的な点に効果を及ぼすだけでなく、「意味内容を伝える」という機能も当然あるが、本実践はこれらの手段の持つ、対話の構成員への心情的効果にも着目したものであり、これらの手段の効果を一般論として「雰囲気作り」に限定しているわけではないことに留意されたい。